

(特集：ワークショップ (第29回年次学術集会より))

## 臨床医が臨床検査技師に期待するもの ～精神科領域から

寺田 整司

### What clinicians in the field of psychiatry expect from laboratory technicians

Seishi Terada

**Summary** The field of clinical medicine has expanded extensively in recent years, and the range that one medical professional can cover is extremely narrow compared to the whole. Therefore, in modern medicine, collaborative medical care is unavoidable. In collaborative medicine, clinical laboratory technicians (CLTs) play a very important role. They are now required to have two abilities. One is to have deep knowledge and experience with medical examinations, and the other is to have good communication skills. The importance of deep knowledge and experience with medical examinations for CLTs is obvious and does not need to be explained. For example, the interpretation of an electroencephalography (EEG) is a kind of battle against artifacts. The skills of excellent CLTs dramatically improve the quality of EEGs. On the other hand, good communication skills have recently become very important for CLTs. In the past, the work of CLTs was completed in the laboratory room. However, in modern medicine, CLTs leave the laboratory room, and communicate with patients and various medical professionals to provide collaborative medical care. Therefore, communication skills are now indispensable for excellent CLTs.

**Key words:** Laboratory medicine, Clinical laboratory technician, Psychiatry, Collaborative medicine

#### I. はじめに

自分が、臨床検査の決定的重要性を痛感したエピソードを、まずは紹介させていただきます。忘れもしません、医師になって最初の冬でした。勤務先である精神科病院の当直室で寝っていると、突然、当直師長さんからの電話で起こされ

ました。夜中の1時ぐらいだったのでしょうか。「すぐ来て下さい！○△×号室の患者さん達が部屋で酒盛りしてます！」... え？なんと!?!... 真夜中、精神科病院の入院部屋（開放病棟）で酒盛りとは!?!... すぐに白衣に着替えて病棟詰所に行くと、3名の容疑者が反省した様子もなく、ふて腐れて椅子に座られています。3人

岡山大学大学院医歯薬学総合研究科精神神経病態学  
〒700-8558 岡山市北区鹿田町2-5-1  
Tel: +81-86-235-7242 Fax: +81-86-235-7246  
E-mail: terada@okayama-u.ac.jp

Department of Neuropsychiatry  
Okayama University Graduate School of Medicine,  
Dentistry, and Pharmaceutical Sciences  
2-5-1 Shikata-cho, Kita-ku, Okayama 700-8558 Japan

とも男性で、全員○△×号室（3人部屋）の患者さん達でした。

さて、どうしたものか!?... 田舎の精神科病院でしたが、臨床検査技師さんは常勤2人が勤務されていました。でも、さすがに、臨床検査技師さんの当直は有りません。看護師さん達は、「3人で酒盛りしてた」のは間違いないと言われます。3人の入院患者さん達の病名は、一人がアルコール依存症、一人が躁うつ病、もう一人が統合失調症でした。医者に成り立ての私は、どうしたらよいか、非常に悩みました。3人とも翌朝まで保護室（隔離部屋）か。でも、本当に3人とも酒を飲んでたのか。お酒を飲んだのは1人だけで、あとの2人は付き合っただけという可能性もあるかもしれない... でも、本人達に聞いても、ふて腐れて「どうせ、保護室でしょ」と云ったり、無言で何も云わず... 何が真実なのか全然、分からない。

現在であれば、持ち運び可能で簡便なアルコール血中濃度の測定器がありますから、それらを利用することも可能かもしれません。しかし、30年ほど前に、そんな簡便な機械はありませんでした。さて、どうしたものか...

当時、医師になりたての自分は結構、様々なことに意欲がありました... 実は、夜中に起こされた晩の数ヶ月前に、その病院に勤務されている臨床検査技師の方に奨められて、薬物の血中濃度を自分で測定できるよう指導してもらっていたのでした。精神科病院で、結構、救急も診ていた病院であり、かつ、てんかんの患者さんもかなり多数通院されていたこともあり、てんかん薬の過量服薬などを自分でも休日夜間に測定できれば、という思いからでした。その時に、技師の方が次いでのように、「アルコールも同じ遣り方で測れます。此処に試薬がありますし」と教えてくれていたのでした。今と違い、当時は未だ（自分の）記憶力も比較的保たれていたため、そのことを思い出し、夜中に一人、検査室でアルコールの血中濃度を測定したのでした。

その結果... 吃驚したことに、2人は有罪、1人（統合失調症）は無罪だったことが判明しました。結果が非常に綺麗に出たことに感銘を受けました。統合失調症の患者さんは未だ若い人で緘黙ぎみの方だったので、年配2人のオジサ

ン達に誘われて、その場に参加したのでしょうか。本人は、お酒は飲んでいなかったのですが、もともと緘黙でもあり、その場では「自分だけ飲んでいない」ことは言い出しにくかったのだろうと思います。ということで、規則違反し飲酒していた2人は保護室に移動し、残り1人は無事に自室に戻っていただいたのでした。（保護室の使い方については、30年前のことであり、問い詰めないようにお願いします）

今から振り返っても、アルコール血中濃度の結果が無ければ、適切な対処は不可能だったと思います。科学・技術の進展は凄まじく、現在では検査なしで適切な医療を行うことは不可能になっています。検査の専門家としての臨床検査技師の役割は、今後ますます大きくなることでしょう。

## II. チーム医療は必須

医療の劇的な進歩により、現代医学は非常に広範な拡がりを持つようになりました。時間の流れで見れば、始まりは不妊治療や出生前診断から、終わりは諸疾患の終末期医療や遺族のグリーフケアに至るまで、人の一生あるいは其れ以上（生前から死後まで）をカバーしています。また、横の拡がりを見ても、歴史ある内科・外科から様々な科が枝分かれしていき、多種多様な診療科が立ち並び、専門性を誇示しています。自分が医師になった頃に比べても、専門領域の数は2倍ぐらいには増えているように思います。これだけ広汎な医学領域のなかでは、1人の人間が対応できる範囲は、全体から見れば非常に僅かな限られたものとならざるを得ません。そのため、チーム医療の実践は必須です。

また、医療の臨床的な実践に当たっても、医師だけで出来ることは非常に限られています。高度な医療機器・画像機器の操作から、リハビリテーションの実施まで、あるいは本人・家族への丁寧な説明から、医療倫理に関する課題の検討まで全てを医師だけで行うことは、どう考えても不可能です。臨床検査技師、診療放射線技師、看護師、薬剤師、作業療法士、理学療法士、臨床工学技士、医療ソーシャルワーカーなど、多種多様な職種が力を合わせてこそ、最善の医療を提供することが可能となります。その

なかでも、臨床検査技師は、現代の医療を基礎から支える、非常に重要な職種です。優秀な臨床検査技師の方々は、本当に知識・経験とも豊富であり、医師を含めた他の医療職に対する教師となれる存在です。自分自身を振り返っても、脳波の読み方や所見を一番たくさん教えてもらったのは、ベテランの臨床検査技師の方からでした。

### Ⅲ. チーム医療における臨床検査技師の活躍

臨床検査技師の方が活躍される場面も、非常に広がっています。「活躍の場が広がる」ということには2つの側面があるように思われます。

1つは、検査業務自体の拡大と深化です。これは劇的なほどの変化ということが出来ます。全く新しい機器が次々と医療現場に出てきます。また、以前であれば、医師自身が行っていた検査でも、最近は臨床検査技師の方が実施されているという検査も少なくありません。後者の例として、自分の関連している狭い領域のなかだけでも、神経伝導速度検査や頸動脈エコー検査などを挙げることが出来ます。これらの検査は施行に当たり、或る程度の経験が必要です。医学の急速な進歩に付いていくことは、特に医療機器と触れあうことが多い臨床検査技師の世界では大変なことです。

もう1つは、患者さんや他の医療職の人と接する場面が増えていることです。対患者の例として、例えば神経伝導速度検査を取り上げてみます。この検査は侵襲性のある検査であり、神経の障害が殆ど無い患者さんであれば、強い痛みを感じます。そのため、実際の現場では、ただマニュアル通りに神経刺激を与えれば良いというものではなく、患者さんに対して様々な配慮が必要となります。また、侵襲性を有する検査の実施だけでなく、患者さんへの検査内容の説明なども臨床検査技師が行っている施設が増えています。さらに、対医療職であれば、院内感染対策チームや栄養サポートチームなどへの参加などがあります。検査科のなかだけで業務が完遂せず、検査科以外の様々な人々との対話が必要とされる時代が来ています。閉じこもることなく、周りに対し開かれた検査室が必要な時代になりました。

検査の意味を深く理解し実施することに加えて、如何に伝えることができるか、患者への共感的な対応、他の医療者と協調し意思疎通できる能力が求められています。

### Ⅳ. 臨床検査技師の方に期待すること

これは、前項の「3. チーム医療における臨床検査技師の活躍」の話題から直結しています。臨床検査技師の方々に期待されること、それは大きく2つに分けて考えることができます。

1つは幅広い知識と豊富な経験です。医学の進歩に付いていくためには、生涯に亘る勉強が必要です。若い時に得た知識だけで、その後の職業生活を安穩に送る事は出来ない時代となっています。しかも、知識だけでなく、実際の臨床経験も必須です。量の上の水練ではないですが、知識だけで臨床経験がない場合には、現場では役に立たないことが多いものです。経験することで初めて、バラバラの知識が体系化され、何が重要なポイントで、何処に躓きやすい段差が在るのが明らかになります。経験を踏んで体系化された知識を有する場合、それは若い医師をも指導することができる力となります。

もう1つは、コミュニケーション能力です。患者への情報提供の仕方やサポートだけでなく、チーム医療を実践するに際しても、チーム内での意思疎通やカンファレンスが重要となります。チームのなかでは、周りの医療者を指導する立場になることも有ります。他職種の専門家に、如何に分かりやすく情報を伝えることが出来るかは、非常に重要なポイントです。また、患者への情報提供では分かりやすさだけでなく、患者への支持的な態度も必要です。何を伝えるかだけでなく、如何に伝えるかが重要なのが臨床の場です。相手に分かりやすく、なおかつ、相手の気持ちに寄り添うようにというのは、なかなか難しいことです。

最後になりましたが、脳波検査について最近、気になる事を幾つか挙げてみます。数十年前には生理検査の種類も少なく、当時の精神科病院においては、脳波検査は非常に重要視された検査でした。そのため、脳波検査に詳しい臨床検査技師の方が居られることが多く、年若い医師など足下にも及ばないような知識と経験を

有しておられました。その後、脳の生理検査についても様々な機械が登場しており、年若い技師の方にとっては勉強しなければならない機器も多く、最近では脳波検査に慣れていない技師の方も少なくありません。

脳波検査は、てんかん診断と意識障害の診断に関しては、現在でも決定的に重要な検査ですが、脳波の記録は常にアーチファクトとの戦いです。患者さんの動きを観察し、ちゃんと記載できるかどうか、異常な動きの評価と記録、こうした細かい配慮・記録が脳波検査の質を劇的に向上させます。また、患者さんが緊張している場合には、目の上にタオルを置いてみるといった細かい配慮も重要です。ただ、最近の脳波記録の現場では、臨床検査技師の方による詳細な動きの記載を見ることは稀となっています。

## V. 今後

精神科領域は、脳波検査などの例外を除けば、客観的な検査による評価が困難な分野でした。が、最近の医学の進歩により、臨床検査との密接な連携が生まれつつあります。具体的にいえ

ば、精神疾患ごとの事象関連電位の違いとか、抑うつ症状の鑑別診断補助として光トポグラフィ検査などを挙げるができます。精神科領域においても、臨床検査の重要性は今後ますます増えていきそうです。また、認知症疾患については、以前は、精神科医が診ることが多い疾患でしたが、最近では脳神経内科で診療されることも増えました。どちらで診療されるにしても、多様な検査が必要とされ、臨床検査との関係が密接な領域です。

このように、臨床検査技師の方々の活躍の場は今後ますます広がるはずで。と同時に、医学の進歩が続くことを考えれば、日々勉強し続けている方としていない方との間には、次第に大きな差がついてきます。日本においても、全員が横並びという護送船団方式の時代は終わりました。臨床検査の領域においても、出来る技師さんと出来ない技師さんとの違いが、今後ますます広がっていきます。能力に応じて待遇が変わるとい時代とも云えるのかもしれませんが。知識と経験に加え、コミュニケーション能力に長けた人材が必要とされています。